

## 鹿児島大学歯学部について

著者	於保 孝彦
雑誌名	鹿児島大学歯学部紀要
巻	32
ページ	63-65
発行年	2012
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/17054">http://hdl.handle.net/10232/17054</a>

特集：教育活動および研修の報告

## 鹿児島大学歯学部教育について

於保 孝彦

歯学部教育委員会委員長  
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科  
健康科学専攻 発生発達成育学講座  
予防歯科学分野

平成18年度から本学部の教育カリキュラムが新しく組み直されて以来、本年度が6年目に当たるため、現在在籍中の全ての学生がこの新カリキュラムに沿って教育を受けている。旧カリキュラムとの変更点を表1に示した。まず、卒業要件単位数をこれまでの旧カリキュラムと比べて27.5単位減少させて229単位（うち、共通教育40単位）とした。ちなみに単位数の計算について説明すると、90分の講義を15回（半年分）実施すると2単位となる。従って半年間、月～金曜日の全ての時間に講義を行った場合は40単位となる。また削減された27.5単位は、1週当たり約3日半の講義を半年分という計算になる。他大学歯学部の卒業要件単位数（教養科目単位数）をみると、九州大学278（50）、長崎大学189（30）、広島大学206（50）、岡山大学234.5（46）、徳島大学208（51）と様々であり、本学はかなり削減したにもかかわらず、まだ多い方に入る。専門課程ではほとんど全ての時間に授業が組まれており、

学生にとってはやや窮屈な時間割かもしれない。2番目の変更点としては共通教育期間を1年半から1年に短縮し、5年次までで臨床実習を終了としたことである。すなわち従来のカリキュラム全体を半年分早期に終了するよう移行させた形とし、6年次には時間的余裕を持たせて国家試験に向けたまとめ学習をさせることとした。3番目の変更点として、新しい科目が導入された。1年次には、毎週火曜日に桜ヶ丘地区で学ぶ桜ヶ丘デーが設けられ、入学直後から「歯科臨床早期体験実習」が始まる。これは11の診療科に毎週1科ずつローテーションで配属され、主に診療見学と解説が行われている。早期に臨床現場を体験することにより歯科医療に対する興味を高め、医療人としての「たしなみ」を身につけさせることが目的とされている。この際、クリニカルクラークシップを取り入れ、指導教員に加えて6年生も1年生の教育を担当している。すなわち1年生の世話役的な仕事を6年生が行っており、これまでの知識の復習および他者に説明することの難しさなどを体験し、6年生にとっても有意義な時間となっている。また1年次には「全人的歯科医療実践学」の講義が導入された。これは医療倫理、命の尊厳等について学び、他者認識の仕方および他者に対する態度のあり方を再認識させるものである。さらに2年次以降については歯学総合系科目として24の統合系科目が導入された（表2）。これは1つのテーマについて、基礎から臨床の内容を順次展開し、総合的な内容理解に努めさせる講義である。従来の各専門科目の断片的な解説ではなく、関連分野を結びつけながら講義を行うことによって、より理解しやすい内容とすることが目的である。この統合系科目は2～6年次において各学年に数科目ずつ配置されており、その実施時期につ

表1 新カリキュラムの特徴(旧カリキュラムからの変更点)

1. 卒業要件単位数を256.5（うち、共通教育48）から229（同、40）に減少させた。
2. 共通教育期間を1年半から1年に短縮し、5年次までに臨床実習を終了させることとした。
3. 歯学導入系科目として「歯科臨床早期体験実習」、「全人的歯科医療実践学」を新設した。
4. 歯学総合系科目として24の統合系科目（総単位数20.5）を新設した。
5. 離島巡回歯科診療見学実習を新設した。

いては種々意見があったが、従来から配置されている専門科目との兼ね合いを考慮して最初のカリキュラムが組まれた。しかしながら実際の講義を進めていくうちに、配置時期および教授内容について再考を希望する意見が出されている。この点については、23年度の講義が終了して（全科目の講義が1回以上実施された後）検討する予定である。新しい実習としては、臨床実習の一貫として離島巡回歯科診療見学実習が導入された。鹿児島県、鹿児島県歯科医師会、村当局の協力の下、本学部において昭和59年から実施されている巡回診療に学生参加の機会が与えられた。本年度は13回の診療団の派遣が実施されたが、そのうち9回に学生が同行した。各回2名の学生参加であるため全員が体験することはできず、希望者の中から選抜された者のみの実習となっている。鹿児島県は、全国一の離島人口を抱える県であり、本学部は長きにわたって巡回診療を行ってきた実績を持つことから、離島へき地に

おける医療を実際に見て学ぶということは、本学部の特徴的な教育と考えられる。同様の取り組みとして、医歯学総合研究科離島へき地医療人育成センターが主催する「始良市北山地区における地域医療トレーニングキャンプ」への参加がある。医歯学部の学生が1泊2日で現地に赴き地域医療の現場を体験するもので、本年度は歯学部から4名の学生が参加した。

さてこのような改革を行い、順次新カリキュラムへの移行を進めて行く過程で、歯科医学教育について文部科学省主導の改革も進められてきた。高齢化社会の進展とともに歯科の疾病構造に変化を生じ、また歯科医師数の過剰状態が進む中、確かな臨床能力を備えた歯科医師を養成するため様々な提言がなされてきた。各大学へはそれぞれの教育の現状について本省へ出向いてのヒアリングが課せられ、あるいはその結果に応じて各大学での実地調査も行われた。とりわけ臨床実習については診療参加型の実習が推奨され、その取り組みについては特に重点が置かれている。本学部では研修医制度の発足以来、実際の診療に携わるのは研修医が主体となり学生は主に見学をすることが多くなっていた。附属病院の患者数は決して十分とは言えず、ある面やむを得ない実習スタイルではあった。しかしながら卒前に実際の患者にふれる機会は大変重要であるため、各診療科で再度検討し可能な限りその実習を取り入れている。また研修医教育との両立を図るため、一人の患者に研修医と学生が付いて行う屋根瓦方式の実習を取り入れる準備を進めている。さらに臨床実習については評価法の規定が曖昧であったため、各診療科での具体的評価法、評価基準を決定し、運用を始めた。臨床実習終了時には総合的な臨床能力を客観的に評価するために全診療科参加のマルチステーションOSCEの導入を決定し、本年度はトライアル実施の準備を進めている。これらの改革により学生の臨床能力の向上を期待したい。

追加ではあるが、本省からの示唆を受け、卒前・卒後の臨床教育をスムーズに連携させるために臨床実習の実施時期を変更した。24年度からは5年次前期に臨床予備実習を行い、5年次後期から6年次前期の1年間に臨床実習を行うこととした。これに伴い23年度から統合系科目の一部を6年次から4年次に移行した(表2)。

大学教員の第一の任務は、教員であることからすれば「教育」であると思う。この教育について歯学部教員のほとんどは、教育理論、教育方法等についての訓練を受けた経験はなく実際の教育にあたっている。い

表2 統合系科目

学年	科目名	回数(90分)
2年	顔学	8
	地域・離島歯科医療学	7
	齲蝕学	5
	歯性感染症学	10
	唾液腺の基礎と臨床	7
	顎関節症の基礎と臨床	8
	摂食・嚥下障害及び高齢者歯科学	15
3年	口腔顔面発生異常学	15
	歯列咬合の发育	10
	障害児(者)歯科学	5
4年	救急歯科医学	15
	全身疾患口腔徴候学	7
	口腔腫瘍学	8
	口腔外手術学	15
5年	口腔顎顔面疼痛学*	15
	口臭の診断・治療学*	5
	感染制御学・疾患遺伝子学*	10
	最新歯科生体材料・器械特論*	15
	歯科インプラント治療学*	15
	臨床検査学*	15
	医療関係法規	6
	歯科再生医療学	9
	歯科東洋医学	8
総合歯科学	75	

\*平成23年度より4年次へ移行

わばこれまでに独学で積み重ねた知識、経験、研究成果をベースに、よい人材を育成したいという情熱で教育にあたった。私もその一人であるが、毎年講義内容については見直しを行い、最新情報を盛り込みながらスライドのアップデートを欠かさないようにしている。このような教える側の努力は、是非行っていただきたいと思う。また教授こそ当該分野で最も豊富な知識、教育経験を持ち合わせた人材と思われるので、可能な限り教授自らが講義を行っていただきたいし、実習指導にもあたっていただきたい。本学部で教員の学生教育の現場を見て残念に思うのは、時として学生に高圧的態度で接する教員を目にすることである。もちろん叱ることも教育であると思うが、その様子はとも「教え導く」ものではなく、教員という立場を利用して、教育内容とはあまり関係ない所で弱い立場の学生をいじめているようにしか見えない。そもそも学生は学ぶために来ている。また様々な学生が存在する。学生一人一人の特性を理解し、大きく包み込みながら、個々の学生に接する必要がある。初めからできる者もいれば、なかなかできない者もいる。友人も多くうまく勉学を進めることができる者もいれば、つい孤立してしまう者もいる。1学年53名、私は半年間の担当講義が終了するまでには全員の氏名と顔を覚え、それぞれの特徴を把握して卒業まで気を配るように努力している。必要があれば部屋に呼んで話を聞くこともある。

多くの教員がこのように接していけば、教員と学生の関係は良好に保たれ、学習効率の向上へとつながると思う。決して学生を甘やかすつもりはない。教える側と学ぶ側の関係をもう1度見直して、学部全体が学問に対して積極的に取り組む、そして将来いろいろな面で多くの成果を生み出す、そんな教育を期待したい。また、教育理論、方法については、昨年度赴任された歯科医学教育実践学分野の田口教授にさらなるご教示をいただかなければならない。

学問への取り組みに関して、本学部の学生は研究志向が乏しいということをよく耳にする。これまでの教育においては研究についてふれる機会が少なかったのであろうか。この点に関しては今年で4回目となった歯系大学院生研究発表会への参加奨励および今年度初めて学生代表者の発表が組まれたこと、大学院説明会、選択科目（ゼミ）説明会など研究志向学生を増やすための方策が次々に行われている。参加学生の反応はすこぶる良好であり、継続しての実施を希望する者が多かった。このような勉学に対しても研究に対しても積極的な学生に対して、その可能性を大きく伸ばしてやるのは教育者の努めであり、またそうでない者を何とか平均レベルに引き上げるのも教育者の努めである。

時代の流れを先取りし、今後必要とされる人材像を描きながら、最高学府の教員としての自覚を持ち、自らを律しながら優れた人材の育成に努めて行きたい。